

上田が生んだ郷土の偉人 山極勝三郎博士

世界初の人工がん実験成功から、100年。

癌出来つ 意気昂然と 二歩三歩 曲川

(山極博士が実験成功した際に詠んだ句)

山極勝三郎博士の生涯と業績 (1863-1930)

上田藩きっての秀才

1863年(文久3年)、上田藩の下級武士山本家の三男として生まれる。太郎山や千曲川に親しんだ少年時代。向学心に燃え、上田藩始まって以来の秀才といわれる。上田変則中学(現在の上田高校)に進学後、東京の医師である山極家の養子となり、医学の道に進むことを決意する。1880年(明治13年)、東京大学医学部へ入学。卒業後は東大医学部病理学教室助教授時代にドイツへ留学し、世界的病理学者のウィルヒョウ博士のもとで、病理学を修める。1894年(明治27年)帰国。東大医学部教授となり、学生たちに厳格な指導を施したといわれている。

幻のノーベル賞

48歳の若さで日本病理学会の会長に選ばれ、50歳の時からがん研究の基礎実験に取り組み始める。助手の市川厚一と人工がん創生の実験に入って2年、1915年(大正4年)5月、ついに顕微鏡で人工がんを確認。実験成功のニュースは世界中を駆け巡った。当然ノーベル賞候補に挙がったが、先にネズミの胃に人工がんを作ったとしてデンマークのフィゲビルに医学・生理学賞が決定。のちにフィゲビルの実験の間違いが判明。だがその時、山極博士もフィゲビルもこの世の人ではなかった。以後、世界初の人工がん実験の成功者は日本の山極博士であることは、世界中の医学書に記されることになる。幻のノーベル賞といわれる所以だ。

不滅の功績、郷土・上田への思い

大学退官後、世界的がん学者に贈られるドイツのユング賞を受賞。晩年は趣味の俳句にも親しんだ。持病の結核に苦しみながら、強固な意志と、研究者として真実を追究するという信念、家族の支えにより山極博士は世界の医学界に不滅の金字塔を打ち立てたといえる。東京で多忙な学究生活を送りながらも、上田郷友会の創立に携わり、俳号を千曲川にちなんで「曲川」と号するなど、郷里上田を愛しつづけた人でもあった。

山極勝三郎博士 人工がん創製100周年記念事業

● 記念講演

◎日時: 10月25日(日) 16:00~17:30

◎会場: 浄楽寺本堂於(上田市中央5-5-2/山極勝三郎博士生家の菩提寺)

◎聴講無料(先着200名)

「ゴリラと暮らす~ゴリラの森から人間社会を見る~」

◎講師: 山極寿一氏(京大総長・理学博士)

【プロフィール】

都立国立高校、京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士課程修了。理学博士(1987年)。カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンターリサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教授を経て、同研究科教授。河合英雄学芸賞選考委員などを務めている。2014年10月1日より京大総長に就任。京大総長としては初の戦後生まれ。



関連事業のお知らせ

山極勝三郎生誕150周年記念碑 納骨式

東京・谷中墓地に眠る山極勝三郎博士の遺骨を、郷里・上田の菩提寺「浄楽寺」に納骨します。

